

## イントロダクション 第7回「農業体験の役割 -子どもたちの未来を育む-

日本の農業は、農業従事者の減少や高齢化、さらには新規就農者の減少といった深刻な課題に直面している。

この問題を解決し、農業を持続可能な産業として発展させるためには、若い世代の関心を引き付け、農業を魅力的な職業として位置づけることが重要である。

そこで、今回の「あぐレポ」では、幼少期における農業体験が果たす役割に注目し、地域や学校での取り組みを通じて子どもたちが農業に触れる機会の意義を考察する。

このレポートを読んでいたいただいた皆様に共感していただければ幸いである。

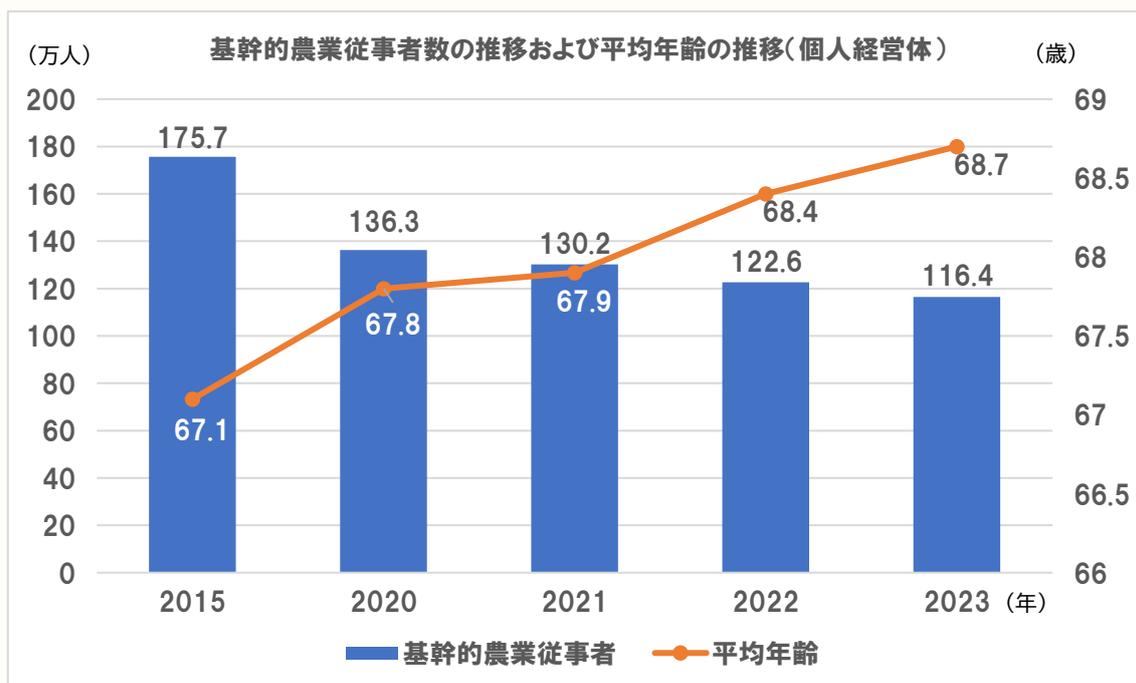
## 農業体験の役割 -子どもたちの未来を育む-

皆さんは、子どもの頃に「土いじり」を楽しんだ経験はあるだろうか？ 私の家庭では、父が自宅の畑で色々な種類の野菜を育てており、幼少期から新鮮な野菜を味わい土に触れる体験を重ねてきた。夕飯時には、「畑からトマトを取ってきて！ それからキュウリもお願い！」という母の声が響き、その情景は未だに鮮明に覚えている。現在、3人の子どもを育てる母となった私は、自宅の庭に小さな畑を作り、父に教わりながら季節の野菜を育て、家族で育てた新鮮な野菜を味わう生活を楽しんでいる。この何気ない日常が、未来の日本の農業を支える一助となるかもしれない。

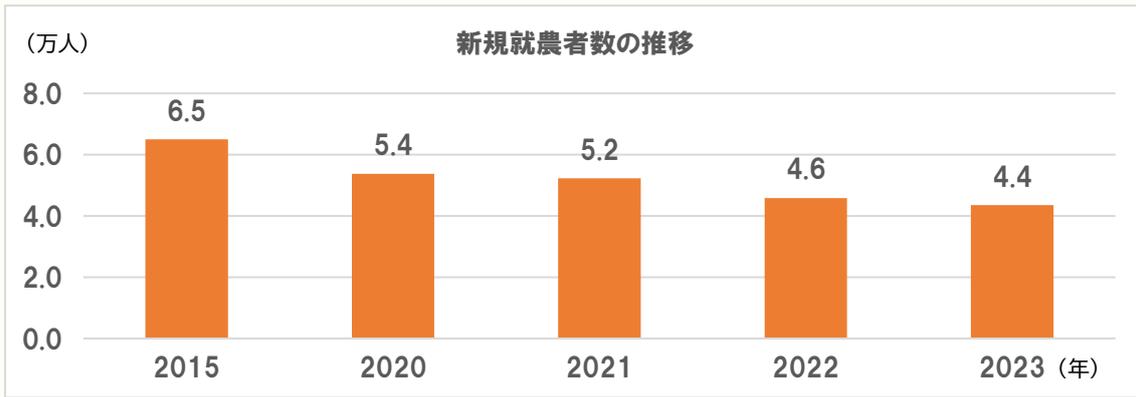
昨今、日本の農業は農業従事者の減少と高齢化という深刻な課題を抱えている。

農林水産省の「農業労働力に関する統計」によると、2015年に約175.7万人であった基幹的農業従事者数（ふだん仕事として自営農業に従事している人）は、2023年には約116.4万人と3割以上減少している。新規就農者数も6.5万人から4.4万人へと減少しており、今後さらに農業従事者の減少に拍車をかけそうだ。また、農業従事者の平均年齢は67.1歳から68.7歳に上昇し高齢化も進んでいる。これらの数値を見ただけでもこのままでは日本の農業に危機感を覚えてしまう。

このように農業を取り巻く環境は厳しいが、農業を持続可能な成長産業として発展させるためには、若い世代の関心を高め、担い手を育成し、確保する必要があるのではないだろうか。そのためには、農業が魅力的な職業の選択肢の一つとなるように、最新技術の導入や働き方の改革に加え、農業教育の早期導入や若手農業者の育成プログラムの充実など、教育面での支援強化が重要と考える。



出所：農林水産省「農業労働力に関する統計」基幹的農業従事者（個人経営体）を参考に OKB 総研にて作成



出所：農林水産省「農業労働力に関する統計」新規就農者数を参考に OKB 総研にて作成

このような現状と課題を踏まえ、今回の「あぐレポ」では、学校や地域で行われている農業体験や地域イベントに注目し、それらが子どもたちの農業への関心を高めるきっかけとしてどのような役割を担っているのかを「学校教育」「地域農家との繋がり」「地産地消」をキーワードに考察してみたい。

## 1. 学校教育における農業体験

学校での農業体験と言えば、多くの人が小学生の頃に植木鉢で育てた花や野菜を思い出すであろう。1年生ではアサガオなどの植物、2年生ではミニトマトやピーマンなどの野菜を育てる学校が多い。これらは、文部科学省が定める「小学校学習指導要領」に基づき、1、2年生の生活科の授業で取り入れられている内容の一部である。この生活科の教科目標には、「身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動の良さや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする」と掲げられている。

大人がイメージする本格的な農業とは異なる小さな取り組みではあるが、教育現場におけるこうした自然との触れ合いは、子どもたちの農業への関心を育む大切な第一歩と言えるだろう。

「なぜ？ どうして？」と好奇心が旺盛な幼い子どもたちにとって、種から植物を育てるという体験は非常に意義深いものとなるであろう。種を植えた時の期待感、芽が出た時の喜び、友達の植物と成長の違いに気づいた時の驚きや不安、花が咲き実をつけた時の安心感、枯れてしまった時の悲しみなど、どの瞬間も子どもたちにとって新鮮な発見であり、五感を通じた学びは特別な体験として、脳裏に刻まれるはずである。

体で感じた経験は、単なる思い出に留まらず、より多くの実をつける方法を調べたり、枯れない対策を考えたりと次へ発展していく可能性も秘めている。おおよそ全ての子どもたちが経験する学校教育的一幕であるが、幼少期における最初の気づきの機会として大切にしたいところである。

## 2. 地域農家との繋がりとその効果

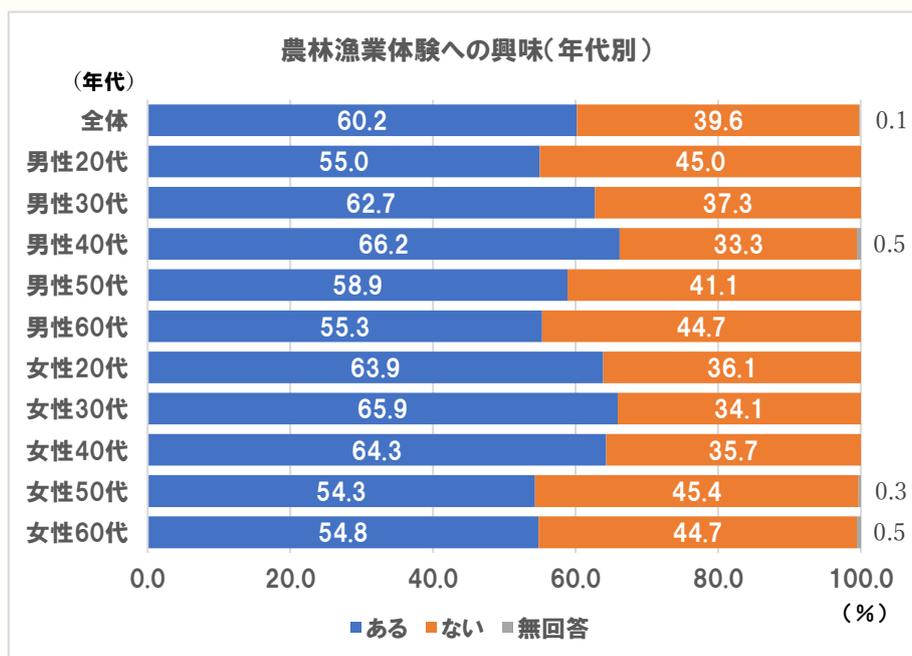
子どもたちや地域住民が参加できる活動として、田植えや稲刈りといった農業体験が各地で行われている。これらの農業体験は、単に農作業に関する知識を学ぶ場にとどまらず、地域農家との繋がりを通じて、自然や食の大切さを肌で感じる貴重な機会となっている。農業体験をすることで、農家への感謝の気持ちが芽生え、食材を大切にする意識が養われていくと言えるだろう。

一方、農家にとっても農業体験を企画することで、次世代の農業を担うであろう子供たちに自然や農業の仕組み、作物を育てる苦労や喜びを伝える絶好の機会となる。例えば、近年頻発している酷暑や豪雨といった異常気象が農業にもたらす影響を身近な課題として実感してもらうことで、環境問題への関心が高まるきっかけとなり、さらにはそれがIT技術や環境改善に取り組む新たなアイデアへ繋がるかもしれない。

このように、農業体験は参加する子どもたち、実施する農家どちらにとっても有意義となり得ることから、一度限りのイベントで終わらせるのではなく、継続的な活動として行われることが理想である。そして周辺地域へ繋がりを広げていくことで、農業に関心を持つ子どもたちが増加していくことを期待したい。

実際に農林水産省が令和2年2月に公表した調査「令和元年度食育活動の全国展開委託事業 報告書（食生活及び農林漁業体験に関する調査）」によると、田植え、収穫、家畜の世話などの農林漁業体験について、「興味がある」と回答した割合は、60.2%と高い水準となっている。また、年代別に見ると、調査対象の20代から60代のうち30代、40代で割合が高くなっており、特に子育て世代での興味が高いことが伺える。

このことから、親子で参加できる農業体験を増やしていくことは、地域の農業の活性化に大きく貢献する可能性があるのではないだろうか。



出所：農林水産省「令和元年度食育活動の全国展開委託事業 報告書」を基に OKB 総研にて作成

### 3. 地産地消の推進

地元のスーパーに立ち寄ると、入口付近の目立つ場所に「地産地消コーナー」が設けられ、さまざまな地場産野菜が売られている。のぼりを立て、生産者の顔写真や圃場の様子をパネルで紹介するなど店舗ごとに工夫を凝らし、消費者に地場産野菜の魅力を伝えている。日々売れ行きは好調で、夕方にはほとんどの野菜が完売となっているのだが、その要因の一つに挙げられるのがやはり新鮮であるということだろう。地元で採れた野菜ということで、収穫から店頭へ並ぶまでの時間が短く、鮮度を保ったまま販売することができる。また、そのことに関連して輸送コストがほとんどかからないため、比較的安価で売られていることもその要因の一つであろう。

では、教育現場における地産地消の推進はどうだろうか。岐阜県では「学校給食地産地消推進事業」を通じて、岐阜県産農産物を積極的に活用した学校給食を提供しており、学校が配布する「給食だより」には、地元食材を使った料理に印をつけるなど、家庭へのPRも積極的に行っている。このように、学校給食そのものが次世代の子どもたちが地産地消を実践する貴重な場となっている。

こういった取り組みがある一方で、地場産野菜の新鮮さや味の良さ、それどころか地域でどのような野菜が作られているか知らない消費者も一定数いるのではないだろうか。前述のとおり、スーパーには「地産地消コーナー」として地場野菜が売られているが、販売スペースは決して広いとは言えず、大きさや形が揃った見た目が美しい流通野菜の販売スペースの方が圧倒的に広がっている。こういった状況からも、地場産野菜の認知度と消費量を上げていくためには、環境整備のさらなる充実が必要かもしれない。

このように、スーパーや自治体によって積極的に地産地消が推進されているわけだが、地産地消の推進に欠かせない手段の一つが農業体験である。

地産地消のメリットに、新鮮な農産物を身近で入手でき、消費者は生産の現場を直接確認できる点がある。また、地域の生産者を知ることによって安心感が生まれ、食と農への親しみ、生産と消費の繋がりや伝統的な食文化の理解を深めることができる。

これらのメリットは、地域で育てられている野菜の存在を知り、その味や特徴を知ることができる農業体験を通して実感できる。農業体験は、地場産野菜・地域農業の魅力を知り、ひいては次世代の農業を担う子どもたちに農業への興味を示す重要な機会となる。

地産地消を促進する手段として、全国で農業体験の普及がさらに進むことを期待したい。

#### 4. 農業体験や地域イベントの取り組み事例

ここまで書いてきたとおり、地域での農業体験、あるいは農業関連イベントは、農業と地域住民、特に子どもたちとの繋がりを深める上で重要な役割を果たしている。

そこで、ここからは当社 OKB 農林研究所が、行政、企業、地域の農家とともに取り組んできた農業体験の事例をいくつか紹介したい。

##### (1) 「おおがき農業ふれあい体験事業」

大垣市では地域の農家と協力し、ブロッコリー、しいたけ、いちご、蜂蜜、鮎、梨の6つの農畜産物を対象に、定植や収穫を体験することができる体験会を実施している。ここでは地元で栽培されている農畜産物の特徴を知ってもらうことを目的としているが、同時に生産者との交流を通じて、生産現場や作り手の思いを伝える機会も提供している。

参加者からは「とにかく新鮮！新鮮というだけで野菜の味がこんなにも変わるのかと驚いた。次回もぜひ参加したいし、これからは、地場産野菜を見かけたら購入したい」、「参加する前は子どもがブロッコリーを食べてくれなかったが、自分で収穫したブロッコリーは喜んで食べてくれたので、体験に参加して良かった」など、地産地消や食育につながる体験事業であった。



【参加者の声をアンケートより抜粋して紹介】

- ・体験を通して、植物・生体・食育など学ぶことが多く、たいへん良かった。
- ・つい先ほどまで生きていた魚を食べたが、体験を通して命の大切さを感じることができた。
- ・梨の袋掛けなど、世話から体験させていただく機会は貴重で、本当にうれしかった。
- ・親子でとても楽しめる体験で良かった。
- ・生産の裏側まで見られて、貴重な体験ができた。

(2)「おおがき農産物フェア」

地元市民が訪れるショッピングセンターでの大垣市主催のイベントであり、生産者が直接消費者に商品を届けることができる貴重な場となっている。遠方から運ばれてくる農産物とは異なり、畑から店舗まで最短ルートで提供できるため、鮮度が良く、栄養価や風味を損なうことがない商品を届けることができ、まさに地産地消の利点を消費者へ伝えることができるイベントとなっている。

また、ここでは生産者が直接消費者の反応や評価、要望を聞くことができ、消費者も生産過程や生産者の“思い”を知ることができることから、互いに交流することで信頼関係も生まれる。

加えて、地元で生産される農産物を紹介するパネル展示や、クイズ形式の企画を通じて、子どもから大人まで地場産品について学べる場にもなっていることが特徴的である。



【参加者の声をアンケートより抜粋して紹介】

- ・大垣市で生産している農作物を知らなかったので知ることができて良かった。
- ・大垣の良い所を再確認できた。
- ・農産物について知る機会がなかなかないのでこれをきっかけに興味を持ちたい。
- ・地域の特産を一度に見ることができよく分かった。
- ・地元の活性化に役立っているイベントだと思う。

### (3)「服と食べ物と家のルーツ探検隊 2023 年度」

岐阜県大垣市に、創業 135 年の歴史を持つ染色工場の老舗企業「株式会社艶金」がある。

同社は本業としてファッション衣料の染色整理の技術を通じてメイド・イン・ジャパンのすばらしさを提案している傍ら、脱炭素経営を最優先課題として地域の学校やイベントなどで、「持続可能な社会をともに」の考えのもと、SDGs の達成に貢献する活動にも取り組んでいる。そして、その活動に共感して共にイベントに取り組んでいるのが、化学合成農薬や化学合成肥料を使わず野菜や米を育てている株式会社土里夢ファームである。

このイベント体験プログラム「服と食べ物と家のルーツ探検隊」では、人間が生きるうえで欠かせない衣食住のルーツを探求している。

衣食住の『衣』として、服の原料となる「和綿」を種から育て、収穫した和綿で糸を紡ぎ、小さなコースターを手織りで作成した。

『食』は、自給自足の重要性を学ぶことに加え、子どもたちが新たな価値観を生み出し、持続可能な社会を築く基盤である農業の意義を学ぶ機会を提供している。自ら農場で収穫した新鮮なオクラやミニトマトを使ったピザを作り、自然の恵みを実感しながら参加者全員で青空ランチを楽しんだ。

『住』は、岐阜県美濃市にある「岐阜県立森林文化アカデミー モリノス」協力のもと、実際に森に入って家のルーツである木について学び、家の基礎となる「ヒノキ」の伐採作業と皮を剥ぐ体験をした。体験の中で、剥ぎたての皮の匂いや味を確かめるなど、非日常を味わう貴重な機会となった。

この一連の取り組みを通じて、「衣」「食」「住」は密接に関わり合っていることを学び、親も子もスタッフも関係なく皆が参加者として楽しむ姿が見られた。





株式会社艶金の編集後記には「内容はもちろん大切ではありますが、何より大事なことは、その場に集まる子どもたち、そして大人たちも『来てよかった』と思えるようなプログラムの時間の提供をすることだと思えます。そのためには、まず私たちが楽しむこと！」と記されており、このメッセージ通り、皆の笑顔が忘れられない体験であった。

## 5. まとめ

ここまで事例などを交えて農業体験の大切さなどをお伝えしてきた。農業体験はただ単に「作業を経験してみる」といったことではなく、食や環境、地域社会との深い繋がりを育む貴重な学びの場となる。幼い頃から自然に触れることで、土や植物の成長、季節の変化、生き物や環境の大切さも直接体感することができ、五感を通じて多くのことを吸収することで、豊かな感性や価値観を育む機会となるであろう。

よって、好奇心旺盛な子どもたちのためにも、私たち大人が農業体験の機会を提供することが大切である。また、農業体験に限らず、地場産野菜を積極的に取入れた食卓を家族で囲むなど、地産地消を通じて地元の農業への関心を高める工夫もできる。

こうした子どもたちへの啓蒙が、現在、日本が直面している「農業の担い手不足」や「高齢化」といった課題の解決に貢献し、日本の農業の未来を支える取り組みとなることに期待したい。

私自身、長きに渡って農業体験の運営に携わってきた。そのため毎年のように顔を合わせる家族もいるのだが、お母さんに抱かれていただけの赤ちゃんが、自身の手で収穫できるまでに成長した姿を見ると感慨深いものがある。また、生産者の話に真剣に耳を傾け、意欲的に農作業に取り組む小学生が、「大人になったら農業をやりたい！」と言ってくれたことは、農業体験を開催した意義を最も実感できた瞬間でもあった。

このように子どもたちから「農業をやりたい！」という言葉が引出せるような農業体験の場をこれからも提供していきたいという意気込みをお伝えし、このレポートを締めたい。

---

## 出所

- ・農林水産省 農業労働力に関する統計

<https://www.maff.go.jp/j/tokei/sihyo/data/08.html>

- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 生活編」

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_006.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_006.pdf)

- ・農林水産省「令和元年度 食育活動の全国展開委託事業 報告書」

[https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taiken\\_tyosa/r01/pdf/r01\\_taiken\\_tyosa.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taiken_tyosa/r01/pdf/r01_taiken_tyosa.pdf)

- ・株式会社艶金「服と食べ物と家のルーツ探検隊総括レポート」

<https://www.tsuyakin.co.jp/archives/2075>